

高接木による耐寒性苗木の大量増殖

(蚕試：一戸分場)

1、背景とねらい

積雪寒冷地の桑栽培は、胴枯病・寒枯れ等の病災害防止対策に多大な経費と労力を必要とすることから、胴枯病の消毒を必要としない桑栽培技術の普及を目標にして、極耐寒性の品種を台木に用い、優良品種を穂木として高接ぎし、耐寒性桑苗木の育成について検討した結果、効率的な高接ぎ苗木の育成技術を確立した。

2、技術内容

1) 台木：極耐寒性桑品種「新桑2号」の古条を用い、4月中旬にさかさ伏込処理により発根促進を行う(図1参照)。

あらかじめ古条を50~60cmに調整(枝条上部位で条径10mm以上のもの)し、20本位を束にして中央で結んでおく。発根促進場所は日当りの良い場所を選定する。

2) 穂木：接木前年に摘芯処理あるいは古条全芽処理により育成する。摘芯処理は春切枝条を7月下旬と9月上旬の2回行うことにより、先枯の少ない穂木が得られる。

また、古条全芽処理は春収穫時に全芽の基部で剪除するか、ていねいに搔芽収穫をする。

穂木の採取は、3月中旬までに行い、直ちに0~5℃の冷蔵庫あるいは冷涼な地下室などの冷暗所に乾燥しないように保護する。

3) 接木の方法：さかさ伏込発根促進した枝条を、処理後30~40日頃に掘り出し、枝条の上部に切接法(図-2参照)により接木する。

接木後接木部の乾燥防止とゆ合促進を図るため、法面60cm位の山形に盛土した床を作り、図-3に準じて保護をする。

4) 育苗管理：接木部が完全に癒着し、新梢が5~6cm伸びた時点でポリフィルムを開放し苗の馴化を図る。7月上~中旬にわき芽整理と施肥及び除草を行う。

9月上旬に新梢40~50cm残して伐採し、接木枝条の充実を図るとともに枝折れを防ぐ。

5) 圃場栽植：苗の堀取りは慣行の苗木育成に準ずるが、台木の間から出ている根は取り除く。本接木苗の栽植後は中刈仕立となるから、畦間2.0m×株間0.8~1.0m(植付本数500~625本/10a)の栽植とする。

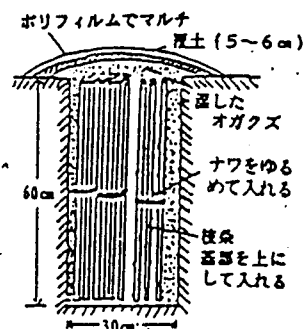


図-1 さかさ伏込発根処理

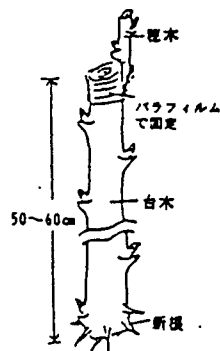


図-2 切接法による高接苗木

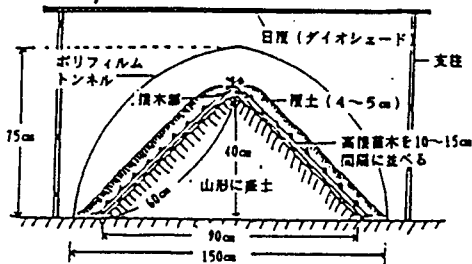


図-3 高接苗木の乾燥防止及びゆ合促進保護

3、指導上の留意事項

- 1) 穂木育成母樹の肥培管理は、窒素質肥料を控目に施用して枝条の充実を図り、摘葉はしない。
- 2) 台木枝条の採取は、古条挿木法の穂木採取に準じて行う。
- 3) 発根処理枝条への接木作業は、新根の折損及び乾燥防止に留意する。
- 4) 高接苗木の乾燥防止及びゆ合促進を図るため、山形に盛土して床を作る場合、土壌が乾燥している際は十分散水する。
- 5) ポリフィルム及び日覆の除去は、曇天及び雨天を選び、晴天の場合は夕方に行う。

4、適用地域

この技術の適用地域は、桑胴枯病の発生地帯で消毒困難な地域とする。

5、参考文献・資料

- 1) 岩手県農政部(1984)：養蚕の新技术と経営 494～503
- 2) 丸川秀雄・松田礼治郎(1985)：東北蚕糸研究報告 10、29
- 3) 小田喜代治・亀卦川恒穂・大津満朗・都築誠・佐々木敬治・橋元進(1985)：岩手県蚕試要報 8、40～50
- 4) 及川英雄・鈴木繁実・八重樫誠次(1988)：岩手県蚕試報告 10、1～88

6、試験成績

表1 さかさ伏込発根処理台木における活着率

台木	穂木(品種)	接木数	活着数	活着率	活着後の枝条	
					枝条数	枝条長
新桑2号	改良嵐返	10本	7本	70%	1.3本	122cm
	しんいちのせ	10	5	50	1.8	70
	しんけんもち	25	23	92	1.2	95
	あおばねずみ	10	6	60	1.2	98
	ゆきしのぎ	20	14	70	1.5	88
	計(平均)	75	55	73	1.3	93

表2 高接苗木の胴枯病等被害率 (%)

栽植場所	台木	穂木	主・支幹 胴枯病	枝条		
				胴枯病	先枯れ	雪折れ
蚕試圃場 (標高220m)	剣持実生	改良嵐返	10.0	0	2.6	1.2
		しんいちのせ	10.0	0	8.1	0
		しんけんもち	10.0	0	0	0
		あおばねずみ	10.0	12.5	6.3	0
現地圃場 (標高585m)	新桑2号	改良嵐返	0	6.3	6.3	0
		しんいちのせ	0	0	13.3	0
		しんけんもち	0	0	5.6	0
		あおばねずみ	0	9.5	4.8	0
		ゆきしのぎ	0	0	4.3	0